



小平信彦 編  
リモートセンシングシリーズ  
気象

朝倉書店, 1980, A 4判, 141頁,  
4,800円

静止気象衛星「ひまわり」の打上げ以来3年の気象観測は、種々の雑誌・テレビなどにより一般的な知識となってきた。しかしこの種のものの全般的な内容について示したものは、日本語としては見当らないようである。われわれ気象衛星に関係する者は気象関係者からも色々質問を受けて、良い成書の出ることを望んでいた。このとき本書が現われたことは、きわめて好都合のことであった。

本書は「ひまわり」に限らず実用的なすべての気象観測衛星について、その内容・利用法をまとめている。構成としては、リモートセンシングによる気象観測の原理・気象観測の手法・得られた画像データの処理・「ひまわり」画像の利用、以上4項目の大分類（以下章と呼ぶ）となっている。

第1章と第2章は、衛星リモートセンシングの物理的な内容と、測器の原理的な説明を簡潔に与えたものである。簡単とはいえまとめは適切で、ユーザーとしての気象関係者などには十分といえる。さらに近い将来の米国の静止気象衛星について、提案されている新測器の概略もある。これで今後10年間程度の静止気象衛星は、大勢として描くことができよう。

執筆時期が多少前であったかも知れないが、米国SEASAT-Aの能動型センサーの一つ、マイクロ波散乱計の記述が無いのは残念である。この散乱計はマイクロ波を海面に投射し、その反射波が海面の状態によって変ずることから、海表面の風向・風速を推定するものである。故障のため観測は数か月しか行なわれなかったが、きわめて興味深いデータが取得されている。日米共同研

究の一つとして、台風時の風浪観測と照合し、かなりの一致を見た。

第3章、第4章は、現在行なわれている実用段階のリモートセンシングが、いかに現業段階で処理・使用されているかについて記述されている。わが国では米国の極軌道衛星のデータも受信しているが、ここでは記述がきわめて少ない。これはそのデータの本格的な利用が、今後の課題として残されているからであろう。しかし前半の第1・2章には原理的に多少述べられている。

一方わが国の静止気象衛星については、そのデータ処理の過程、抽出された情報の詳細が述べられており、気象衛星センター現業々務がよく理解される。さらに得られた雲画像が各種スケールの気象現象に対応して、いかに解釈されるか、いままでの結果がほぼ尽されている。これは予報業務における現在の応用法の概観といえよう。

この後半の2章にはかなり多くの雲画像例が写真図版として載っており、これを眺めるのもわれわれにとっては楽しい。しかし写真説明が日付だけというようなものが大部分である。もちろん本文にはこの写真を用いての解説が詳しいのであるが、その要約的なものを写真説明として出して欲しかった。そうして貰えるなら、読者にとって理解しやすいだけでなく、大きな写真が空しく1頁の大部分を占めている、といった感はあるであろう。

本書は11名の共同執筆によるものである。このように多くの執筆者の場合、一貫して流れるものが無く、単に情報の寄せ集めになりやすい。しかし本書ではこの弊害は感じなかった。これは、執筆者が実質的にセンター設立以来の人々であるためと思う。ここまで到達させた「ひまわり」を十分知って貰いたい、という意欲が良いまとまりを見せたのである。この意味でも本書は一読の価値があり、また参考書としても非常に有益である。

(内藤恵吉)